

「白薔薇の花より香りたつごとくこの身を離れ昇りゆくらむ」

原子野のアラギ歌人永井隆が、好きだった白薔薇に逝く身を重ねて詠んだ辞世の歌、今ここに白薔薇が香ってくるかのような一首です。私には、先立った妻のもとへと旅立つ希望の歌にも聞こえてきます。

永井博士が被爆し白血病に伏していた如己堂の庭に、一本の南天の木があります。

1945年8月9日、長崎に投下された原子爆弾。焼け

け尽くされた原子野の自宅跡に残っていたのは、妻のわずかな遺骨と溶けたサンゴのロザリオでした。傍らに、軒先にあった南天が生きていたのです。永井博士は、その南天を如己堂の庭に植えました。妻の命の代わりのような南天、毎日どんな思いで眺めていたのでしょうか。

「南天の花咲きぬ…おもかげはかなしかるもの…南天の花散りぬ…焼

け跡にわれのみ生きて南天の花に泣きぬ」

この詩と辞世の歌に、山田耕柞が作曲した美しい歌曲があることは、あまり知られていません。「白薔薇」は耕柞の自筆譜が残るのみ、「南天花」楽譜は既に廃版。しかしこの度、渡辺しおりさんのソプラノでよみがえることになりました。中山博之さんが「白薔薇」を編曲しピアノで、「南天の花」の楽譜は長崎の永井徳三郎氏（博士

白薔薇と南天の花

のお孫さん）が提供してくださいました。永井博士の

原画に加藤大道が彫った共作版画「原子野の花」と野中秀司さんの白薔薇の油絵に囲まれ、人の縁の環で表現するコンサートは奇跡に思えます。

南天はいま青々と如己堂に茂り、永井博士白薔薇の辞世から64年、山田耕柞没後50年、平和を祈る戦後70年の春を迎えます。

(松本市波田、古畑博子、66歳)

点差

こうさてん